

八月作品

月集スバル



☆今月の四人☆ (小島ゆかり選)

臍の緒 杜 沢 光一郎 埜 玉

ふと思ふ桐の小箱に入れてありしわれの臍の緒はいかになりけむ
臍の緒を大切にせし風習もいつか廃れつ臍は残れど

何者かにからははれてでもゐる様に齟齬多き日ぞ電にまで打たる
松葉杖に各種歩行器に車椅子リハビリ室はいつもガチャガチャ
折れたのは腰骨なれど体中を揉みに揉まれてはや三箇月

真実の核 日 影 康 子 富 山

竹の子は味噌煮がよろしほとほと時かけて炊く春の日永を
春のあめくらくら煙る昭和の日「天長節の歌」うたひて偲ぶ

寺庭の草取りは目立つ処からと義父ちち教へまししを今なほ守る
老いて読む「昭和天皇物語」に大戦の真実めくられてゆく
たたかひの真実の核は国民に語られず過ぎき戦後七十六年

造化三神 風 間 博 夫 千 葉

あめのみまなあめのみまなかぬしたかみむすびかみむすび かみむすびかみむすび
天之御中主、高御産巢日、神産巢日古事記の中の造化三神
てんちてんちかひびくたかみかひびくたかみあはらあはらあ
天地開闢高天原に初に生れし独神「アメノミナカヌシ」とは
二番目にあらはれし神「タカミムスビ」天照大御神の相談役とふ
三番目にあらはれし神「カミムスビ」お上様かみさまなりしやタカミムスビの
神社参拝二拝二拍手一拝は戦後の作法さう古くない

底砂 水 上 芙 季 東 京

体温は把握し合つて顔半分見せぬビニール越しの同僚
底砂の汚れスポットで取る夜更けメールばかりの一日だつたな
DVD「ゆれる」を見終へ静寂の1Kををり 花ひらく薔薇
水槽のみなみぬまえばほろと息絶えゴールデンウイーク終はりぬ
友だちの夫の帰宅で終へる noon その後一人で食べるボンゴレ

☆ ☆ ☆



水島晴子 兵庫

昔事かごとみなみなかなし窓の向かう木々の葉そよく戦いくさぎてやまず
「シクラメンのかほり」つたへる小椋佳氏部屋着の衿をふかく合はせて
高井戸の旧編集所なつかしも 藪かげのみち御子達のごゑ
足の爪切つてもらつて廊あゆむ窓いつばいに雨しづく昼
うたがはず頼りてありにしをさな犬その命さへ守れざりけり

武田弘之 神奈川

老い耄れの身を励まして高齢者ワクチン接種会場に来つ
ワクチンの接種待つ間を老翁の語る来世の話身に沁む
コロナ禍に耐へつつ生きんさしあたり百歳までの十一年を
六畳の書斎は本に占められて主なるわれの坐る場所なし
「コスモス」のジェンダーギャップ著ければ男がんばれ老いも若きも
「船おらが行く、橋上げてよ」と汽笛鳴る朝霧の町、伊予にある町
あかとき覚めて歌一首推敲しました眠りたり歌忘れたり
ブラキストン線の向かうに帰りしや石狩生まれの栗坪氏逝く
出目金よつねに疫禍を振り払ふごとく尾びれを振りつつ泳ぐ
丁寧テイネイと美誠ミマ闘トウひきトランプと習シユウの闘トウひより美しく

高野公彦 千葉

仲宗角 三重

桐の木のみらさきさやかな花にきて風がうばへり一時にして
きのふここで老女が事故死せしといふそのあとを見つ生き得しわれは
春プリにオリブオイルをかけて喰ふ孫にあきれて箸ももたずあつ
すむしの声するときを部屋内でころびしあばらが今日も痛みぬ
遠くよりかへりくるなる声すれど友は帰らずそれでいいのか
野良猫の何とも言えぬ顔付を哀れに思い成す術のなく
野良猫に違ひはないが地域猫片耳の尖少し切られて
塀かきのうち狹庭なれども餌と水置いて野良猫に人は振る舞う
「野良猫に餌与えるな」紙に書きベニヤに貼つて人は立て掛く
野良猫の行動範囲に驚けり遙か遠くの道で彼と会う

森重 香代子 山口

止むとなく風に門扉の鳴る日にて朝の曲髪なほらざるまま
ベーコンと葱の芽炒め一葉に足りてひとりの夕餉を終へぬ
梟はじつと見詰むるみづからがいま産み終へし白き卵を
裏庭に緑く茂りし路を刈りすき透る皮すいすいと剥く
木斛の艶ある若葉見てをりぬ仏間の障子少し開きて
思ひ切つて去年刈りたる木蓮は遂に芽吹かず裸木のまま
染井吉野満開のいま水面を隙なく覆ふはなびらの色
花大根日に異けに背丈伸ばし来る その紫のけざやかにして
福寿草、花だいこんと採りて挿す供花かたち良し 瓶びんは（口細）
さくら散る水のももいろ菜菔の静まりに蜂はちが翅はねを震はす

古屋祥子 群馬



影山 一男 千葉

バラ清く高く咲きたる五月なれすこし歩かむ街川の辺を
あんぽんと足音のして振り向けばスガに良く似た男が笑ふ
五歳ほど老けたやうだなコロナ禍に甘えて一年家ごもりして
つばくらめ今年も来しや神保町小路の暗きガレージの辺に
主語のなき妙な日本語「安全で安心な五輪聞きたくはなし

桑原 正紀 東京

上階の部屋より降れる物音の半日やまず誰か越しきして
引越しの挨拶に来し若夫婦つがひの鳩のごとく神妙
「末長きおつきあいを」と末長くない身は頭さげられてをり
古風なる挨拶をする若夫婦もうそれだけでころをゆるす
好ましき家族の住めば上階の生活音も耳にさはらず

狩野 一男 東京

何でまたああなたならう春なのにソーシタ、ソーシタ読むバカシなり
空豆の季節になりぬさういへばハシビロコウは愉快なる鳥
「人流」といふ語気になる聖五月しばらく我は「われ」を休まむ
よく分からないが晩春 努力してワクチン接種の予約をしよう
解散は状況次第と言へりけり解散するしかない状況で

宮里 信輝 神奈川

われも知らぬわれのころを五七五七七にして詠むキーボード
ふかき春吹雪くさくらのなびらを呑みをり阿形の狒犬の口
光から食べ物つくる「くわうがふせい」でできる葉っぱは緑の葉っぱ
「蘭展」にさまざまの蘭 花と呼ぶ生殖器官は訪花を待てり
いくつものみどりの星が美しき「碗星雲」枝豆ごはん

岡崎 康行 新潟

〈教室〉より帰り来し妻は昼のとき深い呼吸をしないかと言ふ
飛び跳ねて海底をゆく帆立貝世界初めての画像とぞ言ふ
噴射装置みづから持てる帆立貝地表より低き海底を跳ぶ
砂をかぶりひそとゐるべし帆立貝受精の狂乱は今も忘れて
北極の氷上に亀裂走るといふ温暖化が原因ではないと註して

小島 ゆかり 東京

若者の歌会に混じり帰りがけ背脂ラーメン初めて食べぬ
このごろは昔ふう煮干しだし流行りその人びとをニボラーと呼ぶ
若者の歌を上げまし若者に胃を上げまされ青葉の五月
夕雁のごときさびしさ よく聞かぬがよくわからない言葉増えつつ
抑止力めざし大量殺戮の化学兵器をつくりしノーベル

木畑 紀子 京都

ワクチンの予約電話はサバイバルゲームのごとし敗れつづける
五日目の電話にやうやうワクチンの予約かなひぬ薬をつかみぬ
いつせいにみどりもえでる雨後の野にあな黄変を見する竹叢
竹に花咲きしこの春とげとげの苞が騒立つ黄の葉あひに
あさゆふにコロナ死者数殖えながら篁ひとつ減びに近し

島田 暉 神奈川県

この二年コロナ自粛を強^しひられて老人の身に引き算続く
コロナ禍の後期高齢者死者多し光輝高齢者気を引き締めむ
青嵐に背中押されて道急ぐ夢より覚めて戸を叩く風
コロナ禍に籠^こもるのみなる老人に鶴^{ひよ}の鋭き声ガラス戸を刺す
朝食に何を食べしか忘れたり注意うながす笛吹きケトル

大松 達 知* 東京

父はいまクラウド上にいるらしい位牌で父を呼び出すらしい
iPhoneが位牌に喩えられるならそれでよし父がやってくるなら
五十年。わが一病はもろもろのアレルギーのみ息災だった
こころづもりと書いたはずだがあらいやだ心算と画面にありぬ
ぼんやりとなにも眺めていなかったことに気づかぬくらいぼんやり

田宮 朋子 新潟

不用意に指触れたればパソコンはどうしたの?といふこゑを出す
パソコンの青き画面に文字打つは水にも書くやうなほかなさ
送信キー押せばたちまち言伝では添付ファイルとともに飛びたつ
パソコンの奥処はしらすわがメール迷惑メールフォルダに入ると
田蛙のこゑひびく夜ドアひとつ向かうはリモート会議のさなか



津金 規雄 神奈川県

母の植ゑし芍薬今年も開きたり雑草園のいつとき華やぐ
雨優し風またやさし荒草のまじれる庭のみどり息づく
わづかづつ色を違へて並び咲く芍薬たちの個性よろしも
母を許す思ひ湧きたりつばみより長き時経て芍薬咲けば
芍薬を切り来て活けし卓上に蟻出現す黒きインセクト

小山 富紀子 京都

疫神^{えきじん}がしのび笑ひをしつつゆく黄砂にかすむ桜の下を
ひとつづつ絆の切れてゆく春よ来年約せずその先はなほ
むすび来し絆つぎつぎほどきゆき五色の輪をも解くか疫神
そのかみの疫神払ひしまつりみな中止させたる令和の疫神
疫神にうつちやり喰らはす神無さか八百万在す神々の中に

清水 正子 神奈川県

本馬場へグランプリロードゆくことしビルの狭間にいでたる月は
八億年まへの隕石シャワーにて月の素顔はクレーターだらけ
ステイホーム今日もゆつくり時間ながれ宇宙農場のプラン調べてる
死後のわれたとへば月面農場で赤いミニトマトつまんでるかしら
神さまのレース編みかもあの雲は空中ステッチさながらの出来

小嶋 一郎 佐賀

点けてゐるドラマに見入ることもなくただ座のみこころよりなくて
二首三首作りては棄てまた拾ひ日付またぎぬ昨夜も今宵も
屋根付きの火の見櫓に巣をつくるカササギの知恵笑ふべからず
けふ二度も投函に来てこれもまたふたたび会ひぬ曳かる犬に
天命の生まれは筑紫この身には鼻濁音などつつひに叶はず



田中愛子 埼玉

この春も君は問ふなりわが里の庭先に咲くムスカリの名を
長生きがしあはせだとは限らずと母はりモート通話に言へり
母のくらし支へてきたる貸家のさいこのひとり去る日ちかづく
人住まぬ生家の庭はこでまりの白をのこしてはや暮れてぬん
わらつてと言はれ撮られしものならん施設より母の写真がとどく

橘 芳園 新潟

後藤 美子 北海道

夫が寝ねしづかなる夜を茫とをり音無く降り来ゴビ砂漠の砂
排気筒伝ひて低く夜の音クラクション、ブレーキ音湯船にとどく
すつぱりと諦められぬこと多し取るに足らぬと知りつつも猶
希望的観測といふよき言葉〈希望的〉は含む外れることも
朝光が及び遠近をちちに盛りなり山の辛夷のかがやく白さ

福士りか 青森

再生と思へば楽し還暦を誰よりもまづ我がことほぐ
生まれしこと出会ひしことに感謝する一日ならむ誕生日とは
水晶体砕かれてわれに新しきレンズ備はる 空のまぶしも
揺れるピアス茶髪メッシュ花柄のブラウスもはや文句言はれず
教室にカッコウのこゑ カッコウのこゑに喜ぶ子らを喜ぶ

藤野 早苗 福岡

肩先で雨傘くるくるまはしつゝ薔薇園で聴く流体力学
限りなく遠くてとてつもなく近い(のだらう)薔薇と流体力学
薔薇よりはきつと長生きするわれが考へてゐる薔薇の改名
立ち往生してゐるスタバでアシストをもらへるやうな嬢を指す
午前四時きのふの夜が続きある右目左目めぐすりを注す

水上 比呂美 東京

顰面、金襴袴の土蜘蛛が足踏み鳴らし糸を投げたり
土蜘蛛の糸はねばりのあるごとく頼光の太刀膝丸に絡む
土蜘蛛は武器持たざればありつたけの糸を繰り出し戦ふほかなし
土蜘蛛は糸を投げかけ投げかけてあふむげさまにどうつと倒る
一つおきにすわる座席の空席に死者の脚垂る観世能楽堂

鈴木 竹志 愛知

スーパーの食品売り場にセミが鳴く鯉職まだおよがぬ四月
商魂はいともたやすく季節変ふ食品売り場にセミを鳴かせて
セミの鳴く食品売り場に素麺が買い得よとささやき止まず
訪れのあまりに早き梅雨となり紫陽花の花支度ととのほぬ
紫陽花の蕾が空を見上げをりもう梅雨なのかと戸惑ひを見せ

原賀 環子 東京

ここに住む決め手となりし押立おしたてのれんげ田は空から、三年も空

真秀ろばは消えやすきもの町内のコンビニ裏にありしれんげ田
解答はおほよそさびし紫雲英田をまもりし老いの逝去さきけり
ひとつづつラップ掛けられコンビニに合同葬のやうなバナナら
きのふ、けふ37度1分あり心因性のコロナ羞しも

大野 英子 福岡

もうダメだ心底力が抜けてゆく驟すのみなる首長の口調

心配性の人と会へない日々過ぎてメールは熱ない？消毒せなよ
人間ひとのことはあきらめ初夏が来て密なるあらくさ捌いてゐます
超過密空港なりしが一機のみゆるりターンする主役のやうに
ガラス壁のみなるがらんどうのビル夕焼けに欲しいまま抱いだかるる

松尾 祥子 東京

二歳児は「ぼくのいもうと」とさすりをり日ごとふくらむ母のお腹を
殺生をやめんと決めて買ふミント厨、お風呂場さらばゴキブリ
四十年仕付けとかず眠りみし紅き袖と歩むこの世を

母の帯ギユギユッと締めて薄物をまとへり夏の日差しもよろし
晴天に干す足袋しろくどこまでも昇りつづける足あるごとし



大野英子歌集 令和元年9月刊 一三〇〇円(税別) 送料三〇〇円

甘藍の扉 コスモス叢書第1159篇 柘書房

著者住所 〒812-0028 福岡県福岡市博多区須崎町三十一番三〇二

水上比呂美歌集 令和2年9月刊 二三〇〇円(税別) 送料三〇〇円

青曼珠沙華 コスモス叢書第1177篇 柘書房

著者住所 〒182-0034 東京都調布市下石原二二四―四三

島田 暉歌集 令和3年6月刊 二六〇〇円(税別) 送料三〇〇円

戦あらすな コスモス叢書第1197篇 角川書店

著者住所 〒246-0015 横浜市瀬谷区本郷一一一四―六

松尾祥子歌集 令和3年7月刊 二六〇〇円(税別) 送料三〇〇円

楢田軌道 コスモス叢書第1196篇 角川書店

著者住所 〒168-0065 東京都杉並区浜田山一一二―一四